

## 2024 年度 NLS 大会

### 趣旨説明

「まなざしの臨床 Clinique du regard」

ダニエル・ロア

まなざしの臨床は、私たちの領野において、まったく慎ましい出自をもっています。考慮しなければならない諸例外を除き、その臨床はなにも目を惹くものをもちません。それは分析の開始と同時に始まります。その時患者は寝椅子に横たわり、分析主体となります。分析家の視線によって自らを支えることはもうできません。分析家は分析主体の視覚の外に位置することになるのです。

### ひとつの切断—ひとつの欲望

まさにその時、分離された対象、鏡の関係のやりとりから分離された対象としてのまなざしが、生じます。

対象としてのまなざしがフロイトの欲望から誕生するのは、そのようにしてなのです。その時彼は分析の仕掛けを発明しました。分析のたびに分析家の欲望が介入し、あの領野を—まなざしが、分離された対象として切り離されうる領野を—、創造するのです。

このようにして対象としてのまなざしは、ひとつの引き算から、より根源的にはひとつの切断から、誕生します。

この二重の条件—行為に受肉したひとつの欲望と、切断の不可逆的な様態のことです—、これは私たちの領野においてまなざしを対象として切り離すものですが、それが他の諸領野においても発見されるのかどうか私たちは問うことになるでしょう。それは哲学者、芸術史家による美学理論、芸術的实践、恋愛の实践などの領野のことです。

### 汚い染みと盲目にさせる輝き

私たちの領野に立ち戻るために、治療における対象としてのまなざしの、あの現れを確認しましょう。それは分析主体がそのタブロー[描写]において染みとなっている自分を見るたびのこと—しばしばその染みは非常にはっきりしているわけではありませんが—、あるいは反対に、分析主体がパロールの燃えさかる火で輝きはじめ、分析家に想定されたまなざしを身震いさせ、さらには盲目にさせる場合のことです。この動きは子どもの治療において大変よく見られます。子どもが〈他者〉において感じ取られた裂け目に対峙する責務を負う時に、デッサンや遊び、身振り手振りが、〈他者〉の裂け目を埋めるために、目に見えるものの領野から召喚されます。しかし、逸話、生き生きとした物語、洗練された筋立て、いわゆる大人の主体のセッションのなかで声によってもたらされるものすべては、だからと言って〈他者〉の好奇心をそそらないとか、〈他者〉の注意を飽き飽きとさせるというわけではありません。フロイトによるとこれらはともに欲動の子孫であり、好奇心は窃視の欲動<sup>1</sup>、注意は知の欲動<sup>2</sup>に由来します。

#### 4つの臨床的展望

対象としてのまなざしが、語る身体へ回帰する効果として、私たちの研究には4つの臨床的展望が開かれます。

〈他者〉の領野におけるまなざしの復元の臨床のすべて。切断の効果を封じる狙いをもつこの復元は、まさに転移において開始されます<sup>3</sup>。〈他者〉のまなざしのこの臨床について、ラカンは「私たちはひとつの記号<sup>シニグマ</sup>によって内在化されるものとしてそれを構想しなくてはなりません。・・・[中略]。『Ein einziger Zug<sup>4</sup>ただ一つの線刻』』と言っていますが、これは自我の理想(I(A))の臨床です。主体はそこで自分を愛らしいもの、または憎むべきものとして、きちんとしたものあるいは不作法なものとして見るかもしれません。もしこの臨床が**幻想におけるまなざしの臨床**を伴っていることを私たちが忘れないならば、これは神経症の臨床です。幻想のなかでまなざしは、〈他者〉から差し引かれたかもしくは〈他者〉に足し加えられた享樂の対象として、固定されています。ラカンはこの位置に窃視症と露出症と名づけられた、倒錯のふたつの特徴を召喚しています<sup>5</sup>。

対象としてのまなざしがここで作り上げる、享樂と〈他者〉の結び目は、『テレビジョン』におけるダンテとベアトリーチェにかんする箇所<sup>6</sup>で、ラカンによってたいへん明快なしかたで捉えられています。「ひとつの眼差し、ベアトリーチェ Béatrice の、それもほんの僅かの眼差し、瞬きひとつ、そして、そこから生じる甘美な残滓<sup>トワ・フォア・リヤン</sup>。するとそこに、彼女自身の享樂にしか同一化<sup>イダンテイフイエ</sup>してはならない〈他者〉<sup>オートル</sup>が生じるというわけです。ダンテはその享樂を満足させることができません。というのも、彼は、彼女から、この眼差し、この対象しか得られないのですから。しかし、その享樂について、彼はわたしたちに、神がそれを満たすのだと明言<sup>エノンヌ</sup>します。すなわち、彼はわたしたちに、まさに彼女自身の口から享樂の保証<sup>アスユランス</sup>を得よとそそのかしているのです<sup>6</sup>。」

私たちは**対象としてのまなざしの身体への回帰の臨床**もまた展開すべきでしょう。鏡像の裏地としてのまなざし、それは鏡像を保持したり、反対に解離させたり、鏡像を刻印したり、さらには引き裂いたりするものです。ここでひとつべつの臨床的問いがもちあがります。まなざし、そしてその機能は、心身症の現象のエクリチュール、ラカンによって「認識論的—心身症的な裂け目」とよりよく名づけられたもののエクリチュールにおいて、どこに位置づけられるのか？という問いです。

**対象としてのまなざしの現実界への回帰の臨床**もまた存在します。そこで身体から現実的に引き剥がされたものとして、まなざしは回帰します。注察妄想の「さまようまなざし」、これは主体をあらゆる街角で、遭遇するたびに見張っているものです—フロイトのテキスト「精神分析理論と矛盾するパラノイアの症例報告」<sup>7</sup>はまさに範例的です。あるいは宇宙

全体がまなざしとなっていて、主体はもはや逃れることはできません—私たちはここでボン教授によって提示されラカンが不安のセミネールで喚起した統合失調症の女性患者のデッサンを思い出すことでしょう<sup>8</sup>。一本の木の幹が垂直に列をなした眼で覆われていて、その眼が見ています、「数珠つなぎに描かれた記号とともに、正しいひとつのフレーズを形成する数年前から出現するその最初のフレーズ、彼女の妄想の鍵となるフレーズは—*Io sono sempre vista*、私はつねに見られています<sup>9</sup>、です」。

### 世界に付け加わる享樂的な実体 (substance jouissante) としてのまなざし

これらのふたつの運び—身体への、また、現実界への、まなざしの回帰のことです—が、今日<sup>こんにち</sup>分析治療の外で非常に幅をきかせていることは注目に値します。これらは、生ける身体から引き離された、純粋な享樂的な実体としてのまなざしを機能させる、社会的身体における諸媒体物であり、その反動として生ける身体に害を与えるものです。

映画技術とキネマスコープは古ヨーロッパ大陸、新世界、アメリカ合衆国において同時に登場しましたが、それはフロイトの筆によってなされた窃視欲動の誕生にほんの少し先立つものです。この窃視欲動は残忍性の欲動とともに「小児期においてすでに、性的な性活動とは分離した特別な刺激として登場しているのである<sup>10</sup>」。窃視と露出の倒錯はこの時代に由来します。キネマスコープのように、これらの倒錯はまなざしのこの「独立した傾向」を再利用しており、他の諸身体を召喚するひとつの複合的な装置によってまなざしを生産するのです。

同様に、ラカンの教育活動における対象 a としてのまなざしの誕生は、テレビの時代に属しています。テレビとは、スクリーンから生まれるひとつの映像を生かすために、スクリーンに映し出される映像を消失させる装置のことであり、その結果テレビの視聴者にかかわるもの[視聴者を見るもの]すべてを提示し、テレビの視聴者にかかわらないもの[視聴者を見ないもの]は見せないということになるのです…。ラカンはセミネール 11 巻<sup>11</sup>において、画家のタブローよりももっと手ごわいこの罫から、まなざしを救い出しています。画家のタブローに関して言えば、芸術家の欲望がなければこの罫は存在しません。じつのところ、この罫とは、もはや倒錯者の享樂の罫のことではありません。そうではなくて「明日の主人」に奉仕する剰余享樂の罫なのです。「明日の主人」というのは、今日見るべきものや聞くべきことがらについて、人々に述べたり示したりする者のことです。

今日、対象としてのまなざしは、私たちのポケットのなかに携帯可能な形で、スマートフォンの形で存在しており、あるいはポケットかカバンのなかに存在しています—というのは、種類によっていくらかの違いがいまでも確認できるからです、少なくともブーマーズ社においては。新しい世代の人々にとっては、ことはよりシンプルです。それは手のなかにあり、

*Io sono sempre visto!*と正しくも言いうるだろう、身体から未分離なまま存在しています。

今日、精神分析家や実践家たちは新たなまなざしの臨床と対峙しています。それはスクリーンなき、想像的身体から未分離なままの、現実的なまなざしの臨床です。この接合が、シニフィアンの〈他者〉を、不確実なあるいは混乱した、無秩序であるいはより過激な場合には一分離されていないものが分離不可能であることが明らかになる場合には一不気味で迫害的なものにしていきます。それこそがこの時代の若者の臨床であり、若者とともにはその論理を学ばなければなりません。それは一元特徴が構成する、いくつかの砂つぶ[些細なことがら]に依拠しながら行われます。一元特徴が若者ひとりひとりに印しを作り、そうやって彼らを識別し、それに基づいて彼らは互いを識別しあうことができるのです。これらの諸「一元特徴」を、彼ら自身の言語において識別するのが、私たちの仕事です。私たちの塩つぶ[才気あふれることば]をそこに置く仕方で識別することになるでしょう。

(訳：森綾子)

---

<sup>1</sup> Freud S., *Trois essais sur la théorie sexuelle*, Paris, Gallimard, 1987, p. 121.

[S.フロイト『エロス論集』中山元訳、ちくま学芸文庫、1997年、120頁]

<sup>2</sup> Ibid., p. 123 et p. 137.

[同 124頁、141頁]

<sup>3</sup> 3 Miller J.-A., « D'un regard, l'étrangeté », *La Cause du désir* n° 102, Navarin éditeur, Paris, 2019, p. 45-55.

<sup>4</sup> Lacan J., *Le Séminaire*, livre VII, *Le transfert*, Paris, Seuil, p. 418.

[*Le Séminaire*, livre VIII, *Le transfert*, 414頁のことと思われる。

J.ラカン『転移(下)』小出浩之他訳、岩波書店、2015年、241頁。なお、ただ一つの線刻(フランス語で *traits unaires*)は本論文の最後では一元特徴と訳した]

<sup>5</sup> Lacan J., *Le Séminaire*, livre VI, *D'un Autre à l'autre*, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 2006, chap. XVI.

<sup>6</sup> Lacan J., « Télévision », *Autres écrits*, Paris, Seuil, 2001, p. 526-527.

[J.ラカン『テレビジョン』藤田博史他訳、青土社、1992、62-63頁]

<sup>7</sup> Freud S., « Communication d'un cas de paranoïa en contradiction avec la théorie psychanalytique », *Névrose, psychose et perversion*, Paris, PUF, 1981.

[S.フロイト「精神分析理論にそぐわないパラノイアの一例の報告」、フロイト全集14所収、岩波書店、2010]

<sup>8</sup> Lacan J., *Le Séminaire*, livre X, *L'angoisse*, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 2004, p. 90.

[J.ラカン『不安』小出浩之他訳、岩波書店、2017年、113頁]

<sup>9</sup> Bobon J. « Leçon inaugurale (extraits) », *Ornicar ? Revue du Champ freudien*, n° 29, avril-juin 1984, Navarin éditeur, p. 162-165.

---

<sup>10</sup> Freud S., *Trois essais sur la théorie sexuelle*, op. cit., p. 119.

[S.フロイト、『エロス論集』中山元訳、ちくま学芸文庫、1997年、120頁

なおフランス語訳では引用箇所に *tendances autonomnes* という語が用いられている]

<sup>11</sup> Lacan J., *Le Séminaire*, livre XI, *Les quatre concepts fondamentaux de la psychanalyse*, texte établi par J.-A. Miller, Paris, Seuil, 1973, chap. VI à IX, p. 65-109. (Du regard comme objet petit a)

[J.ラカン、『精神分析の四基本概念』小出浩之他訳、岩波書店、2000年、VIからIX、89頁—137頁。(対象 a としての視線にかんして) ]